

教育研究業績書

2017年05月29日

所属：看護学科

資格：助教

氏名：杉浦 圭子

| | |
|-------|---------------------|
| 研究分野 | 研究内容のキーワード |
| 看護学 | 老年看護学, 地域看護学, 家族看護学 |
| 学位 | 最終学歴 |
| 保健学博士 | 大阪大学大学院 医学系研究科 |

| 教育上の能力に関する事項 | | |
|---|-------------------|---|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 1 教育方法の実践例 | | |
| 1. 親と子の心を支援できる人材育成教育の構築 —ホームページおよびe-learningの開発— | 2008年04月～2009年02月 | 大阪大学現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム「親と子の心を支援できる人材育成教育の構築」において、特任研究員として従事し、広く地域住民への情報提供のためにホームページを展開し、さらに、海外への情報発信のために英文の説明ページも追加した。E-learningについては、大阪大学で展開されている学習システムであるWebCTを使用して、すでに行った講義や特別講演会の内容のビデオおよび教材を編集し、自宅外でも閲覧可能とした。 |
| 2 作成した教科書、教材 | | |
| 1. 看護介入第2版NICから精選した43の看護介入 | 2004年07月 | 看護介入に焦点を当てた学部・大学院コースのテキストとして利用できる。 B5版 全618頁 監訳：早川和生 訳者：加藤憲司、杉浦圭子、西田好江、村田加奈子、安間明日香、浅見恵梨子、中谷伸章、草野恵美子、丸津見雅美、ほか31名 本人担当部分：16章「化学療法管理」、26章「遺伝子カウンセリング」の2章の翻訳を行った。具体的には16章では化学療法についての解説、副作用の説明および対処方法について紹介し、具体的事例を挙げて看護の実際について解説を行った。26章についても、同様に昨今の遺伝子技術についての情報提供および倫理的配慮を含めた遺伝子カウンセリング時の看護介入について紹介した。 掲載頁：16章P237-246、26章P354-P364 |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| 1. 地域看護学セミナー「テーマ：認知障害のみられる高齢者を介護する家族介護者の負担に関する研究」 | 2005年06月07日 | 認知障害のみられる高齢者の家族介護者について介護負担の視点から地域看護学講座の教員、院生、学生が参加する地域看護学セミナーで発表をおこなった。増加の一途をたどる認知症高齢者が在宅である場合、認知障害のない高齢者を介護するのは違い、問題行動などに由来する特有な負担感があると考え、尺度開発を試みた。介護者にとって要介護高齢者の予測不能な行動や介護者の言動を意理解しないことはこと負担感を増大させていた。問題行動由来の介護負担感には「精神的負荷」と「介護量の増大」に大別され、精神的負荷を伴う負担は要介護度3、4の中間の介護度の要介護者に特徴的であった。 |
| 2. The quality of qualitative Research勉強会 | 2005年04月～2005年09月 | 質的研究の考え方、どのような研究がなされてきたか、というThe quality of qualitative Research (Clive Seale著)を所属講座の修士課程の大学院生とともに抄読会をおこなった。看護研究において質的研究は重要であり、その方法論を自分たちで学んだことは今後の看護教育において活用できると考えられる。 |
| 4 その他 | | |

| 職務上の実績に関する事項 | | |
|------------------------------|-----|----|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 1 資格、免許 | | |
| 1. 看護師 | | |
| 2. 養護教諭1種 | | |
| 3. 保健師 | | |
| 2 特許等 | | |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| 4 その他 | | |

| |
|-------------|
| 研究業績等に関する事項 |
|-------------|

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|--|---------|-----------|--|---|
| 1 著書 | | | | |
| 1. 看護介入第2版NICから精選した43の看護介入 | 共 | 2004年07月 | 医学書院 | 監訳：早川和生 訳者：加藤憲司、杉浦圭子、西田好江、村田加奈子、安間明日香、浅見恵梨子、中谷伸章、草野恵美子、九津見雅美、ほか31名 本人担当部分：16章「化学療法管理」、26章「遺伝子カウンセリング」の2章の翻訳を行った。具体的には16章では化学療法についての解説、副作用の説明および対処方法について紹介し、具体的事例を挙げて看護の実際について解説を行った。26章についても、同様に昨今の遺伝子技術についての情報提供および倫理的配慮を含めた遺伝子カウンセリング時の看護介入について紹介した。 掲載頁：16章P237-246、26章P354-P364 |
| 2 学位論文 | | | | |
| 1. 在宅介護者の介護経験および精神的健康に関する性差 | 単 | 2008年12月 | 大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻看護学領域 | 本邦の在宅介護状況における介護者の性別の特徴および介護経験の介護者の精神的健康に及ぼす影響を明らかにするべく博士論文を作成した。男性介護者に対しては、介護開始初期の段階で家事・身体介護に関するサービスを導入し、生活そのものを安定させる支援が重要であると考えられる。また、副介護者が得られにくい環境が閉鎖的な介護環境を憎悪させてしまう可能性が示唆され、そのための支援が重要である。一方、女性介護者は、男性介護者よりも介護負担感、うつ症状の精神的健康は悪く、うつ症状の悪化は気分転換型対処方略を抑制する可能性が示唆された。デイケア・デイサービスなどのレスパトサポートで気分転換が行いやすいような環境づくりが必要であると考えられた。 |
| 2. 介護保険サービス利用者の家族介護者のストレスプロセスモデルにおける性差の検討 | 単 | 2003年01月 | 大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻看護学領域 | 近年増加する男性介護者の現状を踏まえ、介護者研究で多く適用されているストレスプロセスモデルを応用し、介護の内容や介護ストレスの程度における介護者の性差を明らかにすることを目的に研究を行った。共分散構造分析等の結果、女性介護者は男性介護者より高齢で認知障害の強い要介護者を介護しており、介護を行う時間は長く、家事に関連した介護を多く行っていた。さらに、女性介護者のほうが介護負担感が高く、うつ状態であった。男性介護者は女性介護者よりホームヘルプの利用頻度が高かった。 |
| 3 学術論文 | | | | |
| 1. 在宅介護継続配偶者介護者における介護経験と精神的健康状態との因果関係の性差の検討 | 共 | 2010年01月 | 日本公衆衛生雑誌, Vol.57(1), 3-16 (原著論文) | 配偶者介護において介護者をとりまく状況と、介護保険サービス利用回数、介護者の対処方略などの介護経験の経年的な変化と介護者の精神的健康状態との因果関係における性別の特徴を明らかにすることを目的とした。分析は交差遅れ効果モデル (Cross-lagged effect model) を用いた共分散構造分析による多母集団同時分析を行った。夫は2年という時間の経過とともに徐々に介護役割に適応し、ADL介護量や副介護者などの身近なサポートを増加させる傾向がみられた。妻介護者はサービス利用量を増加させていたが精神的健康状態とは関連がなく、かつ介護肯定感の低下がみられた。 著作者：杉浦圭子、伊藤美樹子、九津見雅美、三上洋 |
| 2. 日本の介護保険施設におけるケアスタッフによる BPSD (Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia) のマネジメントに関する研究 | 共 | 2009年12月 | Psychogeriatrics : the official journal of the Japanese Psychogeriatric Society 9(4), 186-195 (原著論文) | 情動-行動共感マネジメントと受容-支援マネジメントが望ましいのが、徘徊、不平不満、夜中起き出す、暴言、介護拒否、帰宅要求、情動-行動共感マネジメントが望ましいのが、いやらしいことを言う、受容-支援マネジメントが望ましいのが異食、情動-行動共感・受容-支援・回避/関与レベル低減マネジメントの3つが望ましいのが収集癖であった。負担度の最も高かった暴力や、同じ事を何度も言う、不潔行為、物盗られ妄想の4つに関する負担度の低いマネジメントは明らかとならなかったことからこれらに対してケアスタッフは試行錯誤していることが示唆された。 著作者：九津見雅美、伊藤美樹子、杉浦圭子、三上洋 |
| 3. ホームヘルパーの仕事意欲測定尺度開発およびその要因 | 共 | 2009年02月 | 日本公衆衛生雑誌, Vol.56(2), 87-100 (原著論文) | 超高齢社会の到来に伴い、在宅福祉の要とされているホームヘルプサービスを担っているホームヘルパーの仕事意欲測定尺度を作成し、さらにその仕事意欲に影響する要因を明らかにすることを目的とした。834人のホームヘルパーに調査した結果、仕事意欲測定尺度は「現状肯定感」と「向上志向」により構成され、現状肯定感には利用者との関係やプロとしての技能を高められる環境、給料に満足していることが有意に正の影響を与え、向上志向には、利用者との関係や生活全般に満足していることが有意に正の |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・ 共著書別 | 発行又は 発表の年月 | 発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称 | 概要 |
|---|-------------|---------------|---|--|
| 3 学術論文 | | | | |
| 4. Gender differences in spousal caregiving in Japan | 共 | 2009年01月 | Journals of Gerontology, series b: SOCIAL SCIENCES, Vol. 64B(1), 147-156 (原著論文) | <p>影響を与えていた。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p> <p>著作者：中谷安寿、杉浦圭子、三上洋</p> <p>本邦においては、介護者の性差を検討した先行研究はほとんどない。そこで、本研究では介護保険サービス利用者の介護者のうち配偶者介護者に着目し、介護者の精神的健康状態に対する関連要因の性差の検討を行った。分析は共分散構造分析による多母集団同時分析を行った。夫介護者では子世代と同居していない、ADL介護提供量が多い、介護期間が短い、介護役割を積極的に受容することは、うつ病的症状の得点の高さと関連がみられた。妻介護者では要介護者の認知障害が重症である、副介護者がいないことがうつの症状の得点の高さと関連がみられたが、夫介護者との有意差はみられなかった。</p> |
| 5. 施設入所認知症高齢者にみられるBPSD (Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia)とケアとの関係 | 共 | 2008年03月 | 大阪大学看護学雑誌, Vol. 14(1), 1-10 | <p>著作者：杉浦圭子、九津見雅美、伊藤美樹子、三上洋</p> <p>施設入所認知症高齢者にみられるBPSDに対して提供されているケアの特徴や傾向を把握することを目的とした。ケアスタッフ275人を調査した結果、多重対応分析において、ケアの特徴として接近型「行動を共にする」「安心感を与える」ケアが布置したが、「身体拘束」や「叱責」という人権擁護の観点から好ましくないケアも布置された。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p> <p>著作者：九津見雅美、伊藤美樹子、杉浦圭子、三上洋</p> |
| 6. 家族介護者における在宅認知症高齢者の問題行動由来の介護負担の特性 | 共 | 2007年11月 | 日本老年医学会雑誌, 44(6), 717-725 | <p>在宅認知症高齢者の問題行動に由来する特有の介護者負担に着目し、従来の尺度とは異なる視点から新たに介護負担感(Caregiver's Burden caused by Behavioral and psychological symptoms of Dementia: CBBB, 以下CBBBと略す)を評価する項目を作成し、高齢者の介護者全般を対象にした大規模サンプルを用いて測定した上で、CBBBの特性を統計学的に明らかにすることを目的とした。CBBBは要介護者の認知障害に対する感度が高く、問題行動に由来する介護者の心理的な緊張や圧迫などの負担をより詳細に表現することができるため、介護者に対する援助の際の支援ニーズの把握に利用可能であると考えられる。</p> <p>著作者：杉浦圭子、伊藤美樹子、三上洋</p> |
| 7. 障害高齢者の家族介護者の1年後の精神的ストレスの変化にかかわる介護保険サービス利用の検討 | 共 | 2005年06月 | 大阪ガスグループ福祉財団研究調査報告書, Vol. 18, 105-113 | <p>介護保険サービスホームヘルプ、デイケア、デイサービス、ショートステイ、訪問看護の利用頻度が介護負担や抑うつなどのストレスを悪化させず、介護肯定感の様なポジティブ感情を高めることができるかを明らかにすることを目的とした最終的な分析対象者は748人であった。低要介護度群において、訪問看護を積極的に利用することは介護負担感の悪化を予防すること、低要介護度や要介護者に認知障害がある場合、ホームヘルプを積極的に利用することは介護肯定感を高めることができる可能性があることが示唆された。</p> <p>著作者：杉浦圭子、伊藤美樹子、三上洋</p> |
| 8. 介護老人保健施設入所者の退所先とその関連要因の検討 | 共 | 2005年01月 | ジェロントロジーニューホライズン, 17(1) 95-102 | <p>介護老人保健施設の入所者の退所先とその関連要因を把握することを目的とした。家庭復帰の割合は年々減少し、各年度とも老健への退所割合が最も多かった。自宅外退所に関連していたのは認知症高齢者自立度と、老老世帯であること、子世代と同居していることであった。認知症が重度であること、老老世帯であることは自宅外退所に、子世代との同居世帯であることは自宅退所に関連していた。共同研究であり、研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p> <p>著作者：九津見雅美、岡村ひとみ、高田晴美、中村香奈、西本美香、原本広子、杉浦圭子、三上洋</p> |
| 9. 在宅介護の状況および介護ストレスに関する介護者の性差の検討 | 共 | 2004年04月 | 日本公衆衛生雑誌, Vol. 51, 240-251 (原著論文) | <p>介護者の在宅介護の状況および介護ストレスの性差を明らかにし、特徴を明確化することを目的とした。大阪府東大阪市にて無記名自記式質問紙による調査を行い、868組の要介護者と介護者を分析対象とした。男性介護者の割合は27.1%であった。結果から、在宅介護の状況および介護ストレスについて、男</p> |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|--------------------------|---------|-----------|-------------------|--|
| 3 学術論文 | | | | |
| | | | | 性介護者と女性介護者では要介護者の状況や介護量、ストレス対処方略などに多くの違いがみられることが明らかとなった。今後、性差を考慮した援助の展開が必要であると考えられる。 著作者：杉浦圭子、伊藤美樹子、三上洋 |
| その他 | | | | |
| 1. 学会ゲストスピーカー | | | | |
| | | | | |
| 2. 学会発表 | | | | |
| | | | | |
| 3. 総説 | | | | |
| | | | | |
| 4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績 | | | | |
| | | | | |
| 5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等 | | | | |
| | | | | |
| 6. 研究費の取得状況 | | | | |
| | | | | |
| 学会及び社会における活動等 | | | | |
| 年月日 | 事項 | | | |
| | | | | |